

ヘブル人への手紙11章「信仰の殿堂」

1A 信仰の証し 1-7

1B 保証と確信 1-3

2B 信仰による義 4-7

1C 良いささげ物 4

2C 神を喜ばせた歩み 5-6

3C 世からの救い 7

2A 族長たちの約束の相続 8-22

1B 真実な約束 8-12

1C 堅い都の待望 8-10

2C 子をもうける力 11-12

2B 天の故郷 13-16

1C 地上での寄留者 13

2C あこがれた都 14-16

3B 受け継がれる信仰 17-22

1C よみがえりの信仰 17-19

2C 晩年の祝福と遺言 20-22

3A エジプトからの救い 23-31

1B ファラオから離れた指導者 23-27

1C 王を恐れなかった親 23

2C 民と苦しむ選択 24-27

2B 滅ぶ者との区別 28-29

3B 約束の地に入る戦い 30-31

4A 約束の地での戦い 32-40

1B 戦った預言者たち 32-34

2B 世における苦しみ 35-38

3B 今の約束を証した人々 39-40

本文

ヘブル人への手紙 11 章を開いてください。私たちは、前回から、著者が、イエスについての希望、また信仰が揺らいで、後ずさりしているところを、励まし、また警告を与えているところを読みました。初めの時は、イエス様を信じて、苦しんでいたけれども、それでも忍耐していました。けれども、あきらめかけていたのです。それで、「ですから、あなたがたの確信を投げ捨ててはいけません。その確信には大きな報いがあります。」と言いましたね(35 節)。

それから、神からの約束のものを手に入れるのは忍耐が必要であると教えますが、ハバククの預言を引用しました。使徒パウロが、ロマ書でも、ガラテヤ書でも引用したところです。主が来られることは遅くなることはない。そして、「わたしの義人は信仰によって生きる。(10:38)」ということです。神は、信じがたい時にご自身に全き信頼を寄せる人を喜ばれます。その信仰を見て、義人とみなされます。そして、信じることによっていのちを保ちます。

そこで 11 章は、数多くの信仰の先輩の足跡をたどっていきます。しばしば、この章は「信仰の殿堂」と呼ばれます。生きた信仰がどのように働いたのか、その証しを見ていくことができます。旧約の時代の人々は、その信仰によって生きました。数多くの証しを取り上げて、12 章 1 節に、「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから」と続きます。彼らによって励ましを受けて、そして自分たちも、信仰の競走を忍耐をもって走り続けようと励まします。信仰を働かせて、忍耐をもってしっかりと働かせていくことを、私たちも 11 章から学んでいきましょう。

1A 信仰の証し 1-7

1B 保証と確信 1-3

¹さて、信仰は、望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるものです。

午前礼拝で説明しましたが、信仰とは、これまでヘブル書で語られてきた、主にある希望を保証するものです。自分が望んでいることではありません。「私は、これこれのことをしたい。神さまにお願いして、それがかなえられるように信じよう。」ではありません。あくまでも、主ご自身に対する希望であり、この方の語られたことについての希望です。それを保証するものだという事です。

そして、ここの保証は「実体」とも訳すことができます。ギリシア語では、元々「下から立たせる」という意味があります。私たちの生きている世界の実体は、多くが信仰によって成り立っています。自分の目で確かめたわけではないのに、証拠や証言などによって、確かにそれは実在すると信じて、生きています。電波がそうでしょう。電波を目で確認できないからといって、それがあると信じていなければ、私たちはスマホを使って、通信を使った操作を一切、することができません。確かにそれはあるのだと信じているからこそ、行動に移せるのです。

これが、将来のことについてなら、なおさらです。牧者チャックの「信仰」という題名の本には、自分の孫がまだ、あごにひげが生えていないのに、ひげを剃り始めたとのこと。ひげが生えるということを信じて、行動に移しているのです。そして、ひげが生えることは、確かな将来です。これが望んでいることの保証、実体ということ。です。

そして、目に見えないものを確信させる、とあります。信仰は、感情ではありません。また、念じる

ことでもありません。確信です。目に見えていないのに、そうだと確信しているのです。みなさんが、罪が赦されたとするとときに、罪が赦されているというのは、目で見ることができるのでしょうか？しかし、罪は赦されたと知っているのです。

²昔の人たちは、この信仰によって称賛されました。

ここの「昔の人たち」の直訳は、「長老」です。ただの昔ではなく、自分たちの模範になる人々という意味合いがあります。そして「称賛」は、「証しを得た」というのが直訳です。後世の人々に語り継がれるようになり、霊的遺産を残しているというような意味合いです。

³信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、その結果、見えるものが、目に見えるものからできたのではないことを悟ります。

4 節から、信仰によって生きた人々の証しが始まります。その前に、その信仰の土台になっている真理について述べられています。

神のみことばによって、この世界が造られているということを私たちは悟っているということです。もちろん、これは創世記の始まりにある、「光よ、あれ」と主が語られたから、光がありました。神のことばがあって、それで造られたものが存在します。見えるものは、目に見えるものからできたものではありません。この悟り、理解には、信仰が必要です。なぜなら、その神の創造の現場に立ち入ることはできないからです。目で確認することはできません。ですから、もちろん宇宙の起源について、探っていくことは有益ですが、本質的には信仰によって、それを悟ることなのです。

そして、これがこれから見る、人々の信仰の生き方を形作ります。すなわち、神の語られたことを信じます。そして、行動に移します。それから、神が万物を造られたのであれば、この方は被造物ができる前から存在していますから、永遠の昔からおられる方です。永遠の神です。そして、天地を造られたのですから、全能の力を持っています。そして、全てを支配しており、主権者です。こういったことを、昔の人々は信じて、それで証しを立てていきました。

2B 信仰による義 4-7

1C 良いささげ物 4

^{4a}信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神に献げ、そのいけにえによって、彼が正しい人であることが証しされました。神が、彼のささげ物を良いささげ物だと証ししてくださったからです。彼は死にましたが、その信仰によって今もなお語っています。

初めの証しは、アベルです。子羊の初子のいけにえをささげて、神はアベルのいけにえを受け

入れられました。兄カインのは受け入れずに、なぜアベルなのか？という疑問を多くの人が持っています。その疑問に対する答えが、ここに書いているのです。「信仰によって」献げた、ということです。それゆえ、彼は正しい人、つまり義と認められたのです。

アベルとカインの話は創世記 4 章に出てきますが、その手前 3 章において、アダムとエバに、神が皮の衣を着せさせました。ここから、神様はいつも、犠牲のいけにえによって、罪を贖う方法をもっておられることを知ります。そこでアベルは、神が罪をお赦しになる方法は、いけにえによるものであることを知りました。アベルは、神が行われたことに従って、いけにえをもって神に近づきました。私たちは、自分が考えていること、感じていることがまず初めにありきで、それから神に近づこうとしているのでしょうか？ そうすれば、カインのささげ物になってしまいます。そうであってはいけません、神の語られたこと、お見せになったことに合わせて献げるのです。

^{4b} 彼は死にましたが、その信仰によって今もなお語っています。

アベルは、兄カインによって殺されました。そのアベルの信仰は、イエスご自身がユダヤ人指導者たちに語られたことです。「マタ 23:35 それは、義人アベルの血から、神殿と祭壇の間でおまえたちが殺した、バラキヤの子ザカリヤの血まで、地上で流される正しい人の血が、すべておまえたちに降りかかるようになるためだ。」アベルが信仰によって、犠牲の子羊のいけにえを献げることは、まさにキリストご自身の証しを立てていました。その義によって、自分自身が殺されましたが、その殺されたことも、キリストが兄弟であるユダヤ人たちに殺されたのです。アベルは、信仰によって生きましたが、そのようにしてキリストの御霊が働いておられて、証しとなっているのです。

2C 神を喜ばせた歩み 5-6

⁵ 信仰によって、エノクは死を見ることがないように移されました。神が彼を移されたので、いなくなりました。彼が神に喜ばれていたことは、移される前から証しされていたのです。

アベルが死に、カインはさまよって、アダムとエバにはセツが与えられました。その子孫であるエノクは、死を見ることがありませんでした。創世記 5 章には、こう書いてあります。「エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった。(24 節)」エノクは、神と共に歩みました。それを信仰によって行っていました。歩むとは、生活すると言い換えてよいでしょう。神を信じながら、日々を歩んでいたのです。祈っていたことでしょうか。主から聞いていたことでしょうか。主に言われたことを、行っていたのでしょうか。そして交わっていました。その信仰の歩みが、神を喜ばせていました。アベルは、信仰によって献げましたが、エノクは信仰によって歩んだのです。

エノクについて、ユダの手紙は、彼が預言を行っていたことを書き記しています。「14-15 アダムから七代目のエノクも、彼らについてこう預言しました。「見よ、主は何万もの聖徒を引き連れて来

られる。すべての者にさばきを行い、不敬虔に生きる者たちのすべての不敬虔な行いと、不敬虔な罪人たちが主に逆らって語ったすべての暴言について、皆を罪に定めるためである。」ノアの時代には、人々は悪に傾いていましたが、エノクの時代にすでに墮落していたようです。その中で、エノクは信仰をもって主と共に歩み、また、主が来られることを預言していました。

そこで、エノクは、まだ死なないうちに移されました。神のもとに移されたのです。そして、ノアの時代に洪水があり、地は水によって裁かれました。同じように、信仰によってこの地上を歩むキリスト者には、キリストが来られる時に死なないうちに、天に移される希望があります。そして、地上には神に御怒りが注がれるのです。

⁶ 信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神がご自分を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。

人が造られたのは、自分を喜ばせるためではなく、神を喜ばせることです。神を喜ばせることによって、自分が造られた目的を果たすことができるので、結果的に満ち足りた生活を送ることができます。そして、神を喜ばせる生活には、信仰が欠かせないことをここで教えています。

神がおられることを、まず信じます。そして、神を求める者に神が報いてくださることも信じないといけません。エノクのように、全く、神がいるのかどうかわからないような、悪い時代になっていても、それでも神がいると信じました。それから、この地上では徒労に終わっているような生活です。目に見える形で報われないように感じます。そうであっても、神が報いてくださることを信じます。このことによって、神を喜ばせることができます。

3C 世からの救い 7

⁷ 信仰によって、ノアはまだ見ていない事柄について神から警告を受けたときに、恐れかしこんで家族の救いのために箱舟を造り、その信仰によって世を罪ありとし、信仰による義を受け継ぐ者となりました。

ノアは、創世記6章を見ますと、「正しい人で、彼の世代の中にあつて全き人であつた。(9節)」とあります。その正しさは、どこから来ているのか？信仰から、ということです。「まだ見ていない事柄について神から警告を受けた」とありますが、地上がすべて水で覆われる大洪水のことです。創世記にある記述をじっくり読むと、「2:5-6 神である主が、地の上に雨を降らせていなかったからである。…ただ、豊かな水(地下水)が地から湧き上がり、大地の全面を潤していた。」とあります。ですから、洪水どころか、雨が降って来ることさえも見ていなかったのです。しかし、神が警告されたことに従って、彼は家族の救いのために箱舟を造りました。

ここに、信仰による義の原型があります。つまり、神のことばを聞いて、それを真実に受け止めて、行動に移します。そして、そのことによって自分は救われることを願っています。キリストが、まさに箱舟のような存在であり、この方であって、世に対する裁きから救われるのです。そして、「信仰によって世を罪あり」とありますが、逆に言うと、ノアのこれらの信仰による行動によって、それまでは罪だと思っていなかった人々が罪ありとされた、ということです。みなさんが、信仰によって義とされたということは、信じていない人たちにとっては、自分たちは罪に定められていることを証しされているということです。

2A 族長たちの約束の相続 8-22

このようにして、アベル、エノク、ノアの証しを見ました。信仰によって正しい者とされて、信じていない者たちが罪に定められる姿を見ました。次は、族長たちの信仰を見ていきます。族長とは、アブラハムから始まる人々です。これまでは、世界に対する神の証しでしたが、これからは、アブラハム個人に対して神が約束を与え、それを信じて、約束を待ち望む証しになります。アブラハムからイサクへ、イサクからヤコブへ、そして息子たちへと引き継がれていきます。

1B 真実な約束 8-12

1C 堅い都の待望 8-10

⁸ 信仰によって、アブラハムは相続財産として受け取るべき地に出て行くようにと召しを受けたときに、それに従い、どこに行くのかを知らずに出て行きました。

これまでと同じように、アブラハムも、主のことばを聞き、その呼びかけに応答して、旅に出かけました。しかも、どこに行くかを知らずに出ていきます。信仰によって動いています。ここで大事なものは、約束があってそれをアブラハムが信じたということです。

そして、著者が注目しているのは、私たちは、その約束が、受け取るべき相続財産の地だということです。命じられて、出ていったけれども、彼らは実際には約束の地を相続していないのです。

⁹ 信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をともに受け継ぐイサクやヤコブと天幕生活をしました。

彼らは天幕生活をしていました。つまり、その地に定住ではなく、他国人のようにして生きたのです。そこにはカナン人がいたので、自分たちはまだ相続をする約束にあずかっていませんでした。

¹⁰ 堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都の設計者、また建設者は神です。

ここは大事な解き明かしです。彼らがカナンの地で天幕生活をしていながら、他国人のように生きていました。その時に、彼らが待ち望んでいた希望が明らかにされているからです。ずっと将来に、ここが自分たちの子孫の相続の地になることを信じていました。しかし、それだけではありません。天におられる神は、究極的には、天にご自身が王座に着いておられる、都があることを知っていたのです。

そして、それは、堅い基礎の上に立てられた都です。この都について、詩篇にこう書いてあります。「46:2-5 それゆえわれらは恐れない。たとえ地が変わり山々が揺れ海のただ中に移るとも。たとえその水が立ち騒ぎ泡立ってもその水かさが増し山々が揺れ動いても。セラ 川がある。その豊かな流れは神の都を喜ばせる。いと高き方のおられるその聖なる所を。神はそのただ中におられその都は揺るがない。神は朝明けまでにこれを助けられる。」山々が揺れ動いても、水が立ち騒いでも、それでも神の都は揺らぐことはありません。むしろ、天地が過ぎ去って、それでもそこに残っている都です。この都の幻は、天のエルサレムとして黙示録 21-22 章で啓示されています。

2C 子をもうける力 11-12

¹¹ アブラハムは、すでにその年を過ぎた身であり、サラ自身も不妊の女であったのに、信仰によって、子をもうける力を得ました。彼が、約束してくださった方を真実な方と考えたからです。¹² こういうわけで、一人の、しかも死んだも同然の人から、天の星のように、また海辺の数えきれない砂のように数多くの子孫が生まれたのです。

アブラハムに与えられていたもう一つの約束は、子孫に対する約束です。天の星のように、海辺の砂のように多くなる、というものです。しかし、アブラハムの生涯の大半が、多く子が与えられないどころか、一人も与えられていませんでした。しかし、ここに神が真実な方だという信仰が与えられていたのです。神の語られたことは、必ずその通りになるという信仰です。

そして、その信仰で証しされるのは、子をもうける力です。死んでも同然のから、つまりサラもアブラハムも、更年期をとつくの昔に迎えていました。そのからだから、新たないのちが与えられたのです。ロマ書では、死んだのによみがえったイエスを信じる信仰につながられています(4:24)。ここでも、神が死んだ者をよみがえらせてくださるという信仰につながっています。

2B 天の故郷 13-16

1C 地上での寄留者 13

¹³ これらの人たちはみな、信仰の人として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるか遠くにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり、寄留者であることを告白していました。

彼らは、約束の地の相続を手にする事なく、死んでいきました。アブラハムが所有したのは、唯一、先に死んだサラを葬るために、ヘブロンで購入した、マクペラの洞穴と周囲の畑だけでありました。しかし、はるか遠くになえられることを信じ切って、喜び迎えていたのです。

そして、生きている間は、旅人であり、寄留者であることを告白していました。アブラハムは、ヘブロン人のヒッタイト人たちに、自分は寄留者であることを告げています(創世 23:4)。そしてヤコブの息子たちは、エジプトでファラオに寄留者であることを伝えています(47:4)。しかし、その中で、信仰を働かせていました。それは、主がおられる天にこそ国籍があるということです。異邦人の間に住んでいるだけでなく、根本的には、地上にすることが寄留者なのだを知っていました。

使徒ペテロも、第一の手紙で話しました。「1:17 また、人をそれぞれのわざにしたがって公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、この世に寄留している時を、恐れつつ過ごさない。」私たちも、地上に生きている間、自分がここにいるようで属していないという感覚を抱いているのは健全なのです。天から降りてくるエルサレムこそ、自分の永遠に住まう都なのだを知るのです。

2C あこがれた都 14-16

¹⁴ そのように言っている人たちは、自分の故郷を求めていることを明らかにしています。¹⁵ もし彼らが思っていたのが、出て来た故郷だったなら、帰る機会があったでしょう。

アブラハムの故郷は、カルディア人のウルの町です。帰ろうと思えば帰れました。

¹⁶ しかし実際には、彼らが憧れていたのは、もっと良い故郷、すなわち天の故郷でした。ですから神は、彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。神が彼らのために都を用意されたのです。

ヘブル書には、「もっと良い」あるいは、「さらにすぐれた」という言葉が頻繁に出てきています。この箇所はでは、さらにすぐれた天の故郷です。これは、キリストが地上に再臨されて建てられる千年王国を越えて、新天新地にある天のエルサレムのことを指しています。今、これを読んでいるのはユダヤ人の信者たちですが、彼らにとって地上のエルサレムだけではないのです。いや、それ以上に、天から降りてくる神の都があるのだということを指し示しています。

そして、神はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。考えてみてください。神の御名が呼ばれるときに、アブラハムの失敗、イサクの失敗、ヤコブの失敗も赤裸々に思い起こされることでしょう。でも、神は恥とはしませんでした。なぜなら、神は一点において彼らに誇りを持ち、喜んでおられたことがあったからです。

3B 受け継がれる信仰 17-22

1C よみがえりの信仰 17-19

¹⁷ 信仰によって、アブラハムは試みを受けたときにイサクを献げました。約束を受けていた彼が、自分のただひとりの子を献げようとしたのです。

話は、先ほどの、子孫が増えることについての約束に戻ります。アブラハムには、イシュマエルもイサクの他にいましたが、信仰によるものではなかったので、相続の子としては退けられます。イサクが彼にとっての独り子です。けれども、この約束の子を、神が献げなさいと命じられたのです。

¹⁸ 神はアブラハムに「イサクにあって、あなたの子孫が起こされる」と言われましたが、¹⁹ 彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできると考えました。それで彼は、比喩的に言えば、イサクを死者の中から取り戻したのです。

もし私がアブラハムだったら、「イサクが約束の子である」と言われたのに、「イサクをささげなさい。」という命令なのですが、その矛盾した二つの約束を自分の中で消化できずに、気が変になったことでしょう。しかし、アブラハムは、「神を恐れることがよくわかった」と主の使いにほめられます。つまり、自分の悟りに頼らず、心を尽くして主に拠り頼んでいたのです。ただ主が仰せになることだからという理由で、その命令に従いました。

主を恐れて、主に拠り頼んでいるときに、私たちには神の思いが与えられます。アブラハムは、二つの相矛盾するように聞こえることばを、どちらも受け入れたので、また別の信仰が彼のうちに生まれ出ました。それは、「イサクがよみがえる」という信仰です。イサクによって子孫がふえる、というのは神が言われたことだから絶対に実現する。そして、「イサクをほふりなさい」と言われるのだから、ほふられたイサクがよみがえることによって、約束が実現するだろうと考えたのです。

そして、このことによって、アブラハムとイサクは、神とその独り子キリストを証していたのです。父が愛する独り子を、罪のためのいけにえとして献げられることを、予め示していました。そして、キリストがよみがえることも、アブラハムの信仰の中で証しされたのです。

2C 晩年の祝福と遺言 20-22

²⁰ 信仰によって、イサクはやがて起こることについて、ヤコブとエサウを祝福しました。

ここから、自分が死ぬ前に、遺言として残すところで信仰を働かせた証しがあります。イサクがヤコブとエサウを祝福する時に、お家騒動があったことを思い出してください。彼は目が見えなくなり、もう自分の死期が近いと思っていました。イサクはエサウのとってきた獣の肉が好きだったので、エサウを祝福しようとしていました。それを知ったりベカが、ヤコブに変装させて、エサウのふりをして、

イサクから祝福してもらいました。エサウが戻ってきても、祝福は残っていません。そこでイサクは、エサウについても語ります。それが信仰によりました。兄が弟に仕えることについての預言です。イサクは、自分の思いとは裏腹に、神のご介入によって二人のことを預言する祝福をしたのです。

²¹ 信仰によって、ヤコブは死ぬときに、ヨセフの息子たちをそれぞれ祝福し、また自分の杖の上に寄りかかって礼拝しました。

ヤコブ自身が、老いて、死が近づいている時、ヨセフが息子マナセとエフライムを連れてきました。ヨセフの息子を、ヤコブは自分自身の息子とすることによって、ヨセフに二倍の分け前を与えることに決めました。それで、二人を祝福するのですが、腕を交差させました。兄のマナセに左の手を置き、弟のエフライムに右の手を置いたのです。それでどちらも豊かにされますが、エフライムのほうが中心になることを預言したのです。私たちの思いを超えるところの、神の取り計らいがあることを信仰の中で、受け取ります。

²² 信仰によって、ヨセフは臨終のときに、イスラエルの子らの脱出について語り、自分の遺骸について指示を与えました。

ヤコブは、エジプトで死にました。そこでミイラにされて、彼の要望のとおり、カナンのある、アブラハムとイサク、また、リベカ、レアも葬られているヘブロンに葬られました。ヨセフも、自分が死ぬ前に、その遺体をエジプトから連れ出してほしいと指図しました。事実、出エジプト記にて、イスラエルがエジプトを脱出するときに、ヨセフの遺体も運んでいったことが書かれています。

このように、族長たちの話から、自分たちが見ない約束を信じることの必要を教えられます。そして、信じるからこそ、神の国における相続を得るのだということです。「ガラ 3:29 あなたがたがキリストのものであれば、アブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。」

3A エジプトからの救い 23-31

そして、証しは、エジプトに下って行って、そこから救い出される歴史に移っていきます。

1B ファラオから離れた指導者 23-27

1C 王を恐れなかった親 23

²³ 信仰によって、モーセは生まれてから三か月の間、両親によって隠されていました。彼らの子のかわいいのを見、また、王の命令を恐れなかったからです。

イスラエル人の歴史は、滅ぼされる危機から始まっています。それは、生まれてくる男の子はみな、ナイル川に投げ込まれるということからです。これは、ファラオからの命令です。しかし、モーセ

の両親は、信仰によってその命令に聞き従いませんでした。生まれてきた子がかわいいのを見たのですが、けれども、イスラエルの子らは星のように、また、海辺の砂のように多くなるという神の約束があります。神を恐れたので、王の命令にしたがわなかったのです。

これは、ユダヤ人信者に必要なことばです。ユダヤ人の不信者からは、イエスの名を語るなどという圧力がかけられていました。しかし、ペテロとヨハネは、「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従うほうが、神の御前に正しいかどうか、判断してください。」と言いましたね(使徒 4:19)。

2C 民と苦しむ選択 24-27

²⁴ 信仰によって、モーセは成人したときに、ファラオの娘の息子と呼ばれることを拒み、²⁵ はかない罪の楽しみにふけるよりも、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。

次に、モーセが 40 歳になって行ったことも、信仰によるものでした。彼の決断に、信仰が働いていました。それは、自分がどこに付くか？という決断です。彼には、二つのアイデンティティーがありました。一つは、ファラオの娘の息子です。もう一つは、神の民です。神の民を選ぶならば、ファラオの娘の息子という地位を捨てなければいけません。そして、神の民、すなわちイスラエルの子らがエジプトで奴隷として虐げられているという苦しみを、自分自身も被らなければいけません。それでも、神の民とともに苦しむことを選びました。

ここで、キリスト者たちも同じようにしてほしいことを示唆しています。つまり、キリストにつくバプテスマを受けました。キリストが苦しみを受けられたのですが、キリストにつけば、自分自身にも迫害や困難がつきまといます。キリストについてさえいなければ、世に与えられた自分の属性の中で生きられるはずですが。それでも、キリストにつき、キリストにある兄弟たちと共に生きることを選ぶ取ります。

²⁶ 彼は、キリストのゆえに受ける辱めを、エジプトの宝にまさる大きな富と考えました。それは、与えられる報いから目を離さなかったからでした。

午前礼拝で、ここの比較をじっくりと見ましたね。モーセは、キリストが来られる前に生きていた人ですが、しかし、キリストは、旧約の聖徒たちにも働いておられたことも説明しました。

モーセが、神の民と苦しみを共にする決断には、信仰による比較がありました。キリストのゆえに受ける辱めと、エジプトの宝とを比べたのです。キリストについていくことによって、世から圧迫を受けます。しかし、報いは、この全世界が与える富よりも、はるかにすぐれています。それは、永遠のいのちであり、神の国の相続です。対して、キリストを捨てて、エジプトの宝のほうを選び取ったとします。そうしたら、その富の楽しみはあるでしょうが、それだけで終わりです。死んだら、富を持

っていくことはできません。そして、死後に裁きを受けます。イエス様は、「マルコ 8:36 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分のいのちを失ったら、何の益があるでしょうか。」と言われました。

²⁷ 信仰によって、彼は王の憤りを恐れることなくエジプトを立ち去りました。目に見えない方を見ているようにして、忍び通したのです。

ここは、モーセが四十歳になった時のことか、それとも八十歳の時のことか、意見が分かれます。彼が四十歳の時に、エジプト人を殺したことが、イスラエル人たちの間にすでに伝わっていることを知り、恐れしました。ファラオが彼を殺そうと思っていました。そして、彼は逃げたのです。けれども、八十歳の時は、九つの災いが下った後に、ファラオがモーセを脅しました。二度と私の顔を見ないように気をつけろ。顔を見たら、死ぬことになるぞ、と言われていました。けれども、主はモーセに、最後の災い、エジプトの長子たちが皆死ぬという災いを伝えなければいけないと主に言われます。それでまた、前に出ていきました。このことを指しているのではないか？という意見です。私は、次の 28 節で過越の祭りの話をしているので、こちらのほうではないか？とは個人的に思っています。

いずれにしても大事なものは、「目に見えない方を見ているようにして、忍び通したのです。」ということです。モーセは、主から明らかに語られていますが、けれども、私たちが神を肉眼で見えないように、彼も見えていなかったのです。しかし、あたかも見えているようにして、ファラオの前に出て行って、対峙していたのです。強大な力を持つファラオの前でも、恐れなかったのです。目に見えない方を、あたかも見えているように確信するのは信仰です。そして、その信仰を、困難な時でも働かせるのが、忍耐です。信仰には、いつも忍耐が伴っています。

2B 滅ぶ者との区別 28-29

²⁸ 信仰によって、彼は長子を滅ぼす者が自分たちに触れることがないように、過越の食事をし、血を振りかけました。

神のさばきがエジプトに下るのですが、神はモーセに、その怒りから免れるための方法を教えられました。子羊をほふって、その血を門柱と鴨居につけて、子羊は火で焼いて食べるという方法です。これは、何のためにそんなことをするのか理解できない、と言って反発しても、一向におかしくないような命令ですね。けれども、モーセは信仰をもって、それをイスラエル人が行なうように指示したのです。これは後に、キリストが十字架につけられ、血を流されることの証しとなっています。アブラハムが、イサクを献げる命令を受けた時、それがキリストの犠牲の死とよみがえりを証ししていたように、ここでも、キリストの流される血を証ししていました。

²⁹ 信仰によって、人々は乾いた陸地に行くのと同じように紅海を渡りました。エジプト人たちは同じことをしようとしましたが、水に呑み込まれてしまいました。

紅海が分かれることについて、これはもちろん信仰によります。信仰がなければ、エジプト人たちが同じように、乾いたところを通っても水に吞まれたように、滅んでしまいます。紅海を渡るのは、第一コリント 10 章にあるように、キリストにつくバプテスマを示していますが、たとえ、水のバプテスマを受けても、信仰によらなければ、受けていない不信者と同じように滅んでしまうのです。

過越の祭りも、紅海が分かれるのにも、見えてくるものは、神は、救いのための区別をしておられるということです。すべての人を裁く、神の裁きがあるのですが、主は、ご自分の憐れみによって救う人々を選び別たれます。その救いに応答するのも、信仰なのです。たとえ、世界がどんなに暗くなり、滅びに向かっても、キリストにあって私たちは安全なのだということです。

3B 約束の地に入る戦い 30-31

そして、著者は、エジプトから救われたイスラエルの民が、約束の地に入った後の、信仰の証しを書きます。

³⁰ 信仰によって、人々が七日間エリコの周囲を回ると、その城壁は崩れ落ちました。

ヨルダン川を渡った後の、エリコの町の攻略です。これは、完全に目に見えない、天の勢力による戦いです。七回、エリコの周囲を回りなさいという命令は、それで何が攻略の助けになるのか、分かりません。けれども、七回周り、七日目はさらに七回回りました。それから、ときの声を上げたら、城壁が崩れ落ちるのです。

³¹ 信仰によって、遊女ラハブは、偵察に来た人たちを穏やかに受け入れたので、不従順な者たちと一緒に滅びずにすみしました。

ラハブは、エリコに偵察に来たイスラエル人たちをかくまいました。彼女は、イスラエルの神を恐れていました。エリコが滅ぼされることも知っていました。それで、彼らをかくまう行動に出たのです。

ここから何が分かるかと言いますと、約束の地に入っても、戦いがあったということです。それは、霊の戦いであります。祈りとみことばの戦いですね。神に従う戦いです。それから、神の民につく戦いです。ラハブのように、かくまったら自分のいのちが危ういです。しかし、人を恐れるよりも、神を恐れることを選び取りました。こうした内なる戦いがあるのです。

4A 約束の地での戦い 32-40

ここまでずっと語ってきましたが、著者は、これ以上、一つ一つ上げていけないとして、大きくまとめて語っていきます。約束の地においては、ダビデの時まで戦いが続きました。

1B 戦った預言者たち 32-34

³² これ以上、何を言いましょうか。もし、ギデオン、バラク、サムソン、エフタ、またダビデ、サムエル、預言者たちについても語れば、時間が足りないでしょう。³³ 彼らは信仰によって、国々を征服し、正しいことを行い、約束のものを手に入れ、獅子の口をふさぎ、³⁴ 火の勢いを消し、剣の刃を逃れ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を敗走させました。

士師たちの働き、それからサムエルが出てきて、次に王としてダビデが立てられました。そして、預言者たちが多く現れます。そこで、彼らの活動がすべて、信仰によるものだという証しです。

国々の征服は、士師たちやダビデが行いました。正しいことは、預言者たちが行っていますね。そして、火の勢いを消したのは、ダニエルの友人三人を思い出します。剣の刃を逃れたのは、ダビデのことを思い出します。弱い者なのに強くされたのは、ギデオンやサムソンもそうでしょう。戦いの勇士、他国の陣営を陥れたのは、士師たちやダビデなどがそうでしょう。そこには、主が戦ってくださるという信仰が必要です。

2B 世における苦しみ 35-38

³⁵ 女たちは、死んだ身内の者たちをよみがえらせていただきました。また、ほかの人たちは、もっとすぐれたよみがえりを得るために、釈放されることを拒んで拷問を受けました。

これはもちろん、エリヤとエリシャです。ツロにいた女と、シュネムの女がそれぞれ、自分の息子を生き返らせてもらいました。

ここで「もっとすぐれたよみがえり」とあります。エリヤやエリシャが行なったよりも、さらにすぐれたよみがえりとは何でしょうか？ そうです、死者からの復活です。エリシャとエリヤが行なったものは、「蘇生」でありました。息を吹き返しましたが、その後死んでしまいます。しかし、キリストが死者の中からよみがえられたときに、それは私たちが今持っている肉体とは違う、復活のからだを持っておられたのです。それは朽ちないからだであり、永遠に残るものです。それゆえ、たとえ、信仰のゆえに苦しみをうけ、殉教しても、復活の希望があることを信じるのです。

³⁶ また、ほかの人たちは嘲られ、むちで打たれ、さらに鎖につながれて牢に入れられる経験をし、

³⁷ また、石で打たれ、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、困窮し、圧迫され、虐待されました。³⁸ この世は彼らにふさわしくありませんでした。彼らは荒野、山、洞穴、地の穴をさまよいました。

あざけられ、むちを打たれた人で有名な預言者はエレミヤです。彼はまた、鎖につながれて牢にも入れられました。石を打たれた人では、ザカリヤがいます(マタイ 23:35)。そしてのこぎりで打

たれ、というのは、イザヤではなかったか、とされています。マナセによって行われた、と言います。剣で切り殺された人では、エレミヤ書に出てくるウリヤがいます。羊ややぎの皮を着ていたのはエリヤです。彼はまた、歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられました。アハブの側近のオバデヤはエリヤの時に、主の預言者をかかまっていたましたが、洞穴と穴とをさまよっていました。

3B 今の約束を証した人々 39-40

³⁹ これらの人たちはみな、その信仰によって称賛されましたが、約束されたものを手に入れることはありませんでした。

彼らが得なかった約束というものは、イエス・キリストご自身です。旧約時代に生きた聖徒たちは、キリストのことを信仰によって証しました。けれども彼ら自身は、キリストに出会うことはありませんでした。

⁴⁰ 神は私たちのために、もっとすぐれたものを用意しておられたので、私たちを抜きにして、彼らが完全な者とされることはなかったのです。

「もっとすぐれたもの」とは、キリストご自身のことです。旧約時代の人々も、キリストが来られる約束を待ち望んで死んでいったほうが、他に別の約束によって生きるよりもはるかにすばらしかったのです。彼らの生き方は、「痒いところに手が届かない」状態と言ったらよいでしょうか。約束のものはこれである、というはっきりとした確信があります。けれども、同時に、それは将来のものであって、自分が生きているうちは実現しないことも知っています。

その約束であるキリストが、私たちには与えられています。そして、この方が用意してくださった天があります。そこに住むために、主は私たちのために戻って来てくださいます。この天にある都が、最終的に新しい天、新しい地に降りてきます。この都を私たちは待ち望んでいるのです。当時のユダヤ人信者たちは、自分の最も身近にあるもの、つまり信仰を置き去りにしようとしてしまいました。私たちも同じです。望んでいるものの保証、あるいは実体であり、目に見えないものの確信です。私たちは、全き信仰によって、真心から神に近づくのです。